

## 「八郎潟・八郎湖学」の創造／潟の歴史を未来につなぐ

谷口吉光（秋田県立大学）

このたび「八郎潟・八郎湖学研究会」という新しい研究会を立ちあげることになった。言うまでもなく、1957年に始まった干拓事業によって、日本第二の汽水湖だった八郎潟は80%が陸地化されて大潟村になり、残った20%が「八郎湖」と呼ばれる淡水湖になった。

私は2003年から秋田地域振興局が始めた「環八郎湖・水の郷創出プロジェクト」という政策に共感し、ずっとそのコーディネーターやアドバイザーを務めてきた。これは流域住民の参加によって八郎湖の環境再生を図ろうという政策で、干拓以来「八郎湖の再生」をテーマにした初めての政策だっただろう。県が主催するセミナーには毎回100人を超える住民が参加してくれた。その姿を見ながら、「八郎潟に対する流域住民の思いは消えていない」と実感していた。

振興局の呼びかけに応じて、10を超える住民団体が多彩な環境活動を展開した。やがてそれがつながり「環八郎湖市民ネットワーク」を結成し、2010年にはその中軸を担う団体としてNPO法人はちろうプロジェクト（はちプロ）が立ち上がった。私は設立以来はちプロの副代表理事を勤めている。はちプロは八郎湖流域の小学校と連携した環境学習や住民団体の連携支援などの事業を行っている。こうした官民連携の盛り上がりもあって、2007年には八郎湖は国の湖沼水質保全特別措置法の指定を受け、さまざまな水質改善対策が行われてきた。

しかし、残念ながら、八郎湖の水質はいまだに改善される見通しが立っていない。八郎湖再生に取り組んできた住民団体も次第に高齢化や活動の停滞に悩むようになってきた。このままでは「八郎湖の再生」という機運そのものが消えてしまう。そんな危機感から、研究者として自分に何ができるかを考えた結果、八郎潟と八郎湖を連続したものととらえ、それを学問的に再評価する活動を始めてはどうかと思うようになった。

思えば、干拓前、八郎潟と地域住民の間には密接な心のつながりと多彩な地域文化があった。しかし、干拓によって周辺地域は八郎潟とともに生きてきた自然と文化の連続性を断ち切られた。大潟村は干拓によって開拓村の歴史を始めたが、周辺地域は八郎潟を奪われ、八郎潟とともに生きていく未来を失った。

しかし、行政手続き上干拓を受け入れてしまった周辺住民や漁師にはこうした悲しみと無念さを公式に語ることは許されず、せいぜい酒の席で「干拓しなければよかったのに」とぼやくのが関の山だったのではないか。

干拓による切断を乗り越えるために、八郎潟と八郎湖を連続したものととらえ、研究者と住民が協働して八郎潟・八郎湖の価値を再評価する新しい学問を作り、過去から未来につながる新しい物語を紡ぎだそう。それが「八郎潟・八郎湖学」の趣旨である。呼びかけに賛同してくれた仲間と3月の設立に向けて準備を進めているところである。

（朝日新聞「あきたを語ろう」 2018年1月21日掲載分に加筆・修正した）